

# 看護学の授業に協同学習を用いる意義

## －「看護学概論」と「成人看護学」を手がかりに－

緒方 巧（梅花女子大学）

牧野典子・江尻晴美（中部大学）

キーワード：協同学習、事前学習、事後学習、看護職志向

### 【企画趣旨】

近年、看護教育においても協同学習が急速に広がりを見せている。中教審答申においてアクティブラーニングが推奨されていることも一因と考えられる。協調性のある主体的で能動的な学習者の育成をめざすアクティブラーニングの成果を十分に得るためには、協同学習の理論と技法を基盤とした授業づくりについて、指導者が深く理解しておく必要がある。本ラウンドテーブル（RT）では、「看護学概論」と「成人看護学」の授業を手がかりに、看護教育において協同の原理を基盤とした授業づくりの意義について、参加者の皆さんとの意見交換を通して、理解を深めることを目的に企画した。

### 【看護学概論】緒方 巧（梅花女子大学）

看護大学の1年生が、前期科目として履修する看護学概論をどのように学び、どのように変化したか、という問いに対し、本報告では協同学習を用いて展開した看護学概論の授業と、学生たちからの反応について紹介したい。その後、本RTに参加していただいた方々と一緒に、看護職を志向している青年期の看護学生が、協同学習を体験しながら看護学概論を学ぶ意義、その際の授業のあり方について意見交換していきたいと考えている。

本学の場合、1年生前期の学生が看護専門科目として最初に学ぶ科目が看護学概論(2単位:90分15回)である。さらに本学では看護専門科目の基礎看護学の基礎看護援助論Ⅰ～Ⅳのうち、基礎看護援助論Ⅰ(2単位:90分30回)も看護学概論と同時期にスタートさせ、理論と技術を関連させて思考できるようにしている。看護学概論は看護の過去・現在を理解しつつ、変化し続ける看護の未来を考える力、各看護学の基盤となる。そのため授業では、学生たちがクラスメートと人間関係を広げながら、他者の思考や価値の多様性に触れて看護を考え学び合うことで、看護職を目指す自己を見つめ、看護への関心と理解、モチベーションを高められることを目指している。授業は講義をベースにしつつ、ほとんど毎回の授業で事前学習課題を設定しているため、それらを活用し協同学習の技法「個人思考」、「ノート・テイキング・ペア」、「シンク・ペア・シェア」、「ラウンド・ロビン」、「ジグソー学習法」、「特派員」「建設的討論法」、緒方が考えた「お散歩自由参観」などを用いて協同による学び合いの時間を設けている。座席は指定席制とし、2回～3回の授業毎に新しいメンバー編成を組んでいる。

看護学生は看護職を目指して入学するが、学生個々の看護職への志望動機や背景、看護職志向への強弱や浅深、学習意欲、学習行動、また日常生活行動における社会性などには多様な個性が伺える。そのため、1年生前期は看護職志向への学生個々の揺れ幅にも関心を向け、それぞれの個性に向き合い寄り添い慈しむ関わりが重要な時期である。看護職を目指す覚悟がまだ曖昧で揺らいでいたとしても、あるいはしっかりと決意が定まっていたとしても、看護学概論を学ぶことで、看護についての新たな発見や看護職がもつ幅広い社会貢献の魅力に視野を広げ、自己の可能性を拓く目標を描いてほしいと願い授業を展開している。今後の授業に向け改善点や新たな示唆が得られることも、本企画への期待と楽しみである。

### 【成人看護学】 牧野典子・江尻晴美（中部大学）

近年、看護学教育において専門的な知識や技術を習得するために様々な工夫が行われている。例えば模擬患者を活用したコミュニケーション能力の修得や、モデル人形を対象に実施する看護技術の習得、生命徴候の設定を自由に変更できる高度機能シミュレーターを使用した観察技術および状態アセスメント学習などである。このような実践能力習得の学習にグループ学習を導入して協同的に学び合う実践が報告されている。

本企画は、専門的な知識および技術の習得とそれらを統合した高度な実践を求める科目において、どのような協同学習が有効か、協同学習の教育的意義について意見交換したいと考えている。

「成人看護学」は大学生が2年生になって履修する科目で、1年次に学んだ解剖学や病態学、疾病治療学などの専門基礎科目と、基礎看護学を基礎知識として、病気をもち治療している人への看護を実践的に学ぶ科目である。例えば、成人慢性期看護学では糖尿病の悪化により失明し回復意欲を失った60代前半の肺炎で入院した女性への退院指導、成人急性期看護学ではくも膜下出血で緊急入院した40代女性の夫へのインフォームド・コンセント、工作中的落下で外傷性気胸を起こした40代男性の状態観察とアセスメントおよび患者家族への対応などが看護師に求められる看護である。必要な看護は、患者の病態や実施される治療の理解だけでは導き出すことができない。治療に伴う病態変化の観察とアセスメント、患者の苦痛と苦悩、病気や治療の理解度と受容状況、家族の心理状態などの情報を統合して初めて対応の方向性（看護計画）が見えて来る。

したがって、授業では、病態と治療、看護の一般的な学習をした後、事例を読んで、発症直後の看護や治療中の看護、退院間近の看護についてペアあるいはグループで考えるというワークを取り入れている。また、授業内容の理解を促し主体的な学びを促進するために学生に事前学習を促し、授業中のグループで学習したことを定着させるために事後学習課題を試みている。事後学習は患者の家族へのインフォームド・コンセントをする場合を想定して、数個の用語を使った説明文を作成するという課題である。

残された課題は、事前学習が学生の自主的な予習学習になるような授業づくりである。